随想　病名の変更

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

昨夜ニュースを見ていたら《サル痘》という病名を《Ｍ痘》へ変えるという。ＷＨＯの意向では『サル痘という名称がサルという特定動物への偏ったイメージを与えることで、誤解を招くから』だという（注１）。

厚生労働省によるサル痘の紹介によれば、サル痘は一九七〇年にザイール（今のコンゴ民主共和国）でヒトでの初めての感染が確認され（―中略―）中央アフリカから西アフリカにかけて流行。病原体はポックスウイルス科オルソポックスウイルス属のサル痘ウイルスにより（―中略―）アフリカに生息するリス等の齧歯類をはじめサルやウサギ等ウイルスを保有する動物との接触でヒトに感染する。二〇二二年の欧米を中心とした流行では八万一、〇〇〇人（十二月一日時点）以上の感染例が報告、常在国から一五例、非常在国から四〇例の死亡憂いが報告されている（以下略）。

そういえば十一月二十八日の読売新聞二八ページの記事に《「糖尿病」改称へ議論・「尿に糖」実態に合わず》というものがあった。

曰く、国内で一、〇〇〇万人が患う糖尿病について、医師や患者らがつくる「日本糖尿病協会」（清野裕会長）は病気の実態にそぐわないとして、新たな病名の検討を始めた。日本糖尿病学会と合同で議論して候補となる病名を二年以内に提案する考えだ。糖尿病は細胞が糖を取り込むのを助けるホルモン「インスリン」の働きが低下し、血液中の党の濃度（血糖）が慢性的に高くなる。かつては「蜜尿病」とも呼ばれたが一九〇七年、日本内科学会が糖尿病に統一した。尿に糖が出る病気とされ、当時は尿検査で診断していた。実際は尿に糖が見られるとは限らない。―中略―同協会の調査では約八割が尿という表記に違和感や羞恥心を抱いている等の理由で病名の変更を求めた―後略―。

わが業界にはニワトリ痘があり、鶏痘と呼ばれている。ヒトの感染症と無関係である場合にはまったく意識されない《病名》が、ヒトが関わることでいきなり大きなセンセーションに繋がることが何かしら奇妙に感じられた。

三年を超える新型コロナウイルス感染症が第二類から季節性インフルエンザと同等の第五類へ分類し直す動きがある。著者からすれば『やっと!!』という気持ちである。『行政の立場からすれば、行政責任ですべてをカバーするという負担が軽減される、という意義も少なくないのだろう』等と邪推してしまう。

鶏病に《伝染性気管支炎》というコロナウイルス感染症がよく知られている。ＩＢという略称でよく知られ、業界では大きな生産性障害を来すモノとして対策に苦労している鶏病の一つである。

著者の研究所の若い研究員の学位テーマとして、ここ数年野外におけるこのウイルスの動態や、感染鶏の反応、あるいは野外症例の疫学追跡等を積極的に行っている。

この疾患そのものについては、著者が社会に参加して以来、常に業界では大きな対策テーマとして取り上げられ続けている。本来は激しい呼吸器症状を主徴とし、大きな産卵障害を招くため、伝染性気管支炎（ＩＢ）

という名称も的確に全体像を表していた、と思う。しかし、各種のワクチンを適用されている現在の養鶏フィールドでは典型的な呼吸器病としての発現はむしろまれであり、多くは慢性腎障害や幼雛時期の生殖器への後遺症として残る生殖器障害（卵巣・輸卵管の地目的なダメージ）として顕在化する。このような事例を見るにつけ、単純にＩＢあるいは伝染性気管支炎と呼ぶ病名に違和感を禁じ得ない。

著者は近年、セミナー等で『《ニワトリコロナ感染症》と名称を変えてはいかが…』と提案しているのだが、皆さんはどう思われますか?!

コロナウイルス感染症といえば、同紙の十一月二十七日七ページで、主要国の新型コロナウイルスの感染状況（累積感染者数）が表示されていた。それによれば、一位がアメリカで九、八五六万二、三〇〇人、二位がインドの四、四六七万二、四〇〇人、三位フランスの三、七七八万九、八〇〇人、四位ドイツ三、六七七万三、一〇〇人、五位ブラジル三、五一五万九、五〇〇人、六位韓国二、四五九万八、九〇〇人と続き、日本はイギリスの二、四五九万一、一〇〇人に次いで二、四四一万五、〇〇〇人である（十一月二十六日午後八時時点の累計、アメリカジョンズ・ホプキンス大の集計等による）（注２）。

国際会議や外国の街頭等の画面を見れば、ほとんどマスク姿を見かけないし、海外における新型コロナウイルス・ＰＣＲ検査結果を大々的に報道する向きもないので《日本以外にはこのような数値には不感症となっているのか》とも思っていたが、久々にこうした統計値に接して『海外各国で、まだこのような数値にとらわれているのだろうか?!』と少し気になった。ちなみに、総人口数の異なる各国の累積数値を出してみたところ、で、感染率を併記しない限り無意味に思えるし、潜在感染者数を類推する資料がないことや、二度かかり・三度かかりについての調査に関してはほとんど情報に接することがない。このような数値を敢えて公示することに何の意味があるのだろうか、と思ってしまう。

注１：ＮＨＫ・ＮＥＷＳ・ＷＥＢより：欧米を中心に感染が広がるサル痘について、ＷＨＯは新たな名称として『Ｍ痘』を使うよう推奨すると発表した。

（―中略―）今年の感染拡大に伴ってサル痘という名称が『特定の動物等への誤解や偏見に繋がる』という指摘が出ていたことから、ＷＨＯが名称の変更を検討していた。後略

注２：ＣＯＶＩＤ－19に関するインターネット情報によれば、読売新聞とは相当異なった数値が挙げられている。それによれば、全世界における感染者累計数は六億四、六九九万八、九八九人であり、回復者数は六億二、五三四万七、〇九四人、死亡者数は六六三万八、六七八人となっている。また、アメリカの感染者数は一億五三万二、七一一人、インド四、四六七万三、三七九人、フランス三、七七七万八、四一七人、ドイツ三、六四六万三、四八五人、ブラジル三、五二六万八、二五五人、韓国二、七〇九万八、七三四人、日本二、四六五万四、七七〇人、イタリア二、四二六万六六〇人、イギリス二、四〇〇万一〇一人、ロシア二、一五八万四、七四〇人、トルコ一、七〇〇万五、五三七人、スペイン一、五三九万五、五〇四人、ベトナム一、一五一万五、四二三人、オーストラリア一、〇六五万五、五九六人等と続いている。一方、激しい感染レベルで苦しんだ筈のフィリピンの感染者数が四五三万五、四八七人となっており、このような統計数値の曖昧さが浮き出ているようである。フィリピンにおけるＣＯＶＩＤ－19による社会混乱は、当時著者のラボに留学していたフィリピン大学からの留学生が帰国できず、困っていたとかリアルな事情が伝わり、この程度の感染者数で落ち着くことは難しいことが容易に類推できる。

アメリカのＣＯＶＩＤ－19に対する防御規定はわが国にそれと対比してさほど緩いものではなく、また各国のそれもアメリカに準じるものであると思われる。一方、テレビ報道等で接する欧米各国の街頭では生活の通常復帰を実感する風景が圧倒的である。第八波が喧伝されてからのわが国の経済の萎縮度合いを対比するとき、こうした行政の規制とそれへの柔軟な対応（自己責任による）から、欧米諸国の人々が持つタフなメンタリティを実感する。